

鳴門ゴム鯛鏝

辰丸船頭

三ツ石達生

ゴムカブラ釣り

1 ゴムカブラ釣りとの出会い

子供の頃から海に出て、魚を釣っていた。

親父が漁師だったからである。

その頃から「高校卒業でけたら ええわ」その程度に思っていた。

高校を卒業し、すぐに親について漁に出始めたが、仕事の厳しさにびっくりであった。

朝から晩まで親父とマンツーマン、それが一年続いた。

とても孤独な仕事だと思った。しかも怒られるばかりの毎日。

一回のほめ言葉もなく、さすがに人間不信になる。

給料なんてものは無く、あっても小遣い程度。

船上だけでなく、家に帰ってからもとんでもないくらいの仕事を用意されている。

まるで”部活の一年生”だ。

そうこうしているうちに、
親父がエサを使わない釣り（これがいわゆるゴムカブラ釣り。

エサに似せたゴムを付けた鉛＝ゴムカブラを使用する釣り方法。）
をシーズンオフにするのを見た。

これがゴムカブラ釣りとの出会いである。

その後道具を借りて、見よう見まねでしてみる。

釣りは、ゴムカブラを海底まで沈め、一定速度で 10m 程度手繰りあげ、
反応がなければ海底まで落とし、また 10m 程度手繰りあげるという行為を単純に
繰り返すだけである。

仕掛けも単純であるが、釣り方自体もごく単純であった。

しかしこれがおもしろく、単純なだけに奥が深く、ストレス解消になる。

春と秋には怒られながら海についていく毎日であったが、シーズンオフである夏場だけがストレス解消の時であった。

2 自作仕掛けでの初めての釣果と感想など

その後、その釣りに使うビシ道具（道糸にビシ（小さな鉛）を等間隔に打った仕掛け）（ゴムカブラ釣りに使う）を初めて自作し、さっそく船外機で家の前の海へ漕ぎ出し仕掛けを下ろし手繰ってみる。

結果、この時の釣果はマダイ 1 kg 級 1 匹、0.8kg 1 匹、0.4kg 3 匹。

かなりおもしろい。

この頃の仕掛けは、今思い出しても笑える雑な仕掛けであった。

ゴムカブラもチラッと見ただけで思い出して自作してみた。

今思うと大ざっぱな作りで、それはまるで「火消しの提灯」という感じだった。

こんなんでも釣れるのはすごいことだと思った。

これが私のゴムカブラ人生の始まりである。

初期の仕掛け（ビシ道具）は市販のナイロン道具の先の部分に大ビシをつけたものを使用していた。

大ビシは付けなければ底がとれない（マダイは通常海底付近に生息しており、ゴムカブラ釣りは海底を確実にとらえて釣るのが基本である）。

なぜならラインには水の抵抗（浮力）がかかり、下に引っ張る力が必要となるので付けなければならない。

自分で改良をしていると親父もそれが気になるらしく、アドバイスというか昔からの口癖みたいな言葉が出てくる。

道具（仕掛け）はナイロン 12 号で作るのが当たり前であるが、市販のものは 14 号しかなかったので、当初自分はそれでやっていた。

後に 12 号で作ると釣りの感覚が分かりヒット率、キャッチ率が向上し、自分の中で初めて上達したという感じになった。

初めての大型は、駆け出し時代、木製の船外機でのこと。

八重潮（潮止まり）場の大型が釣れるポイント。

底掛かりと思い、船に巻き付け潮上へ。

引っ張る船で「もう切れただろう」と思い、手で持つ

まだ外れてないなと思ったら、ビクビクという感触

あげてみると 60cm、3kg ほどの大型で自分でもびっくりだった。

でも相手が一番びっくりしていただろう。

ゴムカブラ釣りは本来、夏から秋にかけてエサ取り（ベラとかハゲ、フグなどの小魚）の多くなる時に行われる釣りである。

その時期にエサで釣りをすると、確実にエサ取りにエサをとられてまともに釣りにならない。

ゴムカブラ釣りはそれらに餌をとられないし針掛かりもほとんどない。

エサ取りの多い水域には当然マダイもいる。

そこでマダイがゴムカブラに興味を示してゴムカブラに近づき口を使った時、そいつが掛かるのである。

カブラ釣りはもともと大型釣りと言われていたが、後で述べるように現在は大型小物に関わらず、あらゆる魚、例えばエサ取りまで釣れている。

魚がエサを食べに来るだけでなく、興味を示して口でゴムにとりあえずさわってみる（人間で言えば手に取ってみる）反応

その反応の時点で大小問わず針に掛かってくるのである。

3 歴史と現在

ゴムカブラ釣りはウッコ（夏場によく見かける小さく細長いよく泳ぐ赤い虫）に似せて出来あがった釣りと言われている。

誰が始めたか定かでなく、明石方面から入ってきたのではと伝えられているが、実際のルーツは不明である。

初期のカブラは8～10 匁のなまりに1本の赤色のゴムを直接キリで埋め込んでいただけの簡単なものであった。

ただ、現在のカブラも少々工夫は加えられてはいるが、初期のものと基本的には大差ない。

ゴムカブラを海底に落とし、単純に引き上げ、アタリがなければ底に落とし、また手繰りあげるというのを繰り返すという釣り方自体、全く変わっていない。

ゴムカブラ釣りは昔から主に夏に行われる釣りであり、鳴門でも一年を通してこの釣りをやっている者は現在私以外に少ない。

特にエサでも釣り難い冬場は皆無であり、経験のない者はまず釣れない。

その冬場にゴムカブラでマダイを釣り上げるには長年の経験とノウハウが必要である。

これまで約20年、これで完成かと毎年思うのに、あきらめの悪い自分はいつも何かを探し、カブラに改良を加えてみたり、毎年新しいポイントを提案したりして、一年中ゴムカブラでマダイを狙っている。

『継続』こそが この釣り方を大きく進化させたといえるかもしれない。

4 マダイのアタリについて

基本的にマダイのアタリは、底とりをしてたぐり始めて1～2mのあいだにゴムの伸びるような感覚があり、そのままたぐりあげて5～6mのあたりでまるで急ブレーキのかかる様な感じになることが多い。ラインが止まりきって初めのひと引きで通常締め込むが、小物のはじめのアタリ（いわゆる前アタリ）で針掛かりというのが多い。

かなり海底から離れて針掛かりする場合も多いが、この場合ゴムの先だけ引っ張って、魚は10～20m近く追いかけてきて、最後にマダイは自分のテリトリーに帰ろうとして、口が大きく開いて下向きになり、針は上を向いているので針掛かりする、ということが想像される。

針掛かりするイメージとしては、魚は水ごとゴムを吸い込み、針先も同時に口に入るというのと、一つ考えられるのが、ゴムの根元まで食い込み、横から口の中を針ごとしごく、という感じだ。

しかし、よく口の外から掛かることもあるので、実際のところは不明である。マダイ以外の魚の場合、特に底魚は手繰りはじめにガツンといきなり針掛かりすることが多い。

アッコ（キジハタ）、ヒラメ、ガシラ、マゴチなど口が大きな魚は特に掛かりがよい。

経験を積むと、針掛かりする状況、針掛かりしてからの引き方等の微妙な違いで、釣り上げられなくともやりとり中に魚の種類や掛かり具合がだいたい予想でき、ポイント選びの材料にもなる。

ビシ道具は、前述したようにナイロン12号というのが昔から漁師のなかでの基本である。

ゴムカブラのアタリは言葉で表すのは難しいが、前アタリとしてまず底付近の1～2mで「ゲー」、「ボソボソ」、「ク!」「もぞもぞ」、「フ!」といったような、ゴムの伸びる感覚がある。

その時伸びの無い（少ない）敏感な糸を使っていると、「ゴツゴツ」、「ガチガチ」、「ゴツン」といったような大きなアタリになり、なぜかその後の本アタリにつながらず、追いかけてこなくなる。

誘いに関しても、敏感な糸を使うと手繰り方が直接カブラに伝わるので、ゴムの動きがスムーズに動かず、ぎこちない人工的な動きになり、魚が興味を示さなくなるようである。

したがって、道具はナイロンラインを昔から使うのが基本となっている。

太さに関しても、細ければ伸びがあるが、太ければ伸びが少なく水の抵抗も大きくなり、魚を誘うに至って大きなハンディとなる。

細さに関しては、以前細いナイロン 10 号でビシ道具を作って試したが、12 号と比べ、耐久性が大きく下がってしまうので、今はナイロン 12 号でビシ道具は作っている。

長さはナイロン 12 号で 60m、それより上の 60m はテトロン 12 号を使用しており、合わせて 120m となる。深さが深くなるほど、ビシ道具自体がクッションになるので、60m 以上は逆に伸びの少ないテトロンを使用し、底とりをやすくしている。

5 竿への応用（竿仕様のゴムカブラ釣り）とカブラ考

ある年の初夏、芋農家の知人にゴムカブラ釣りを伝授した。

その年の 9 月から 10 月にかけては連日昼休みに（日中は暑いので 2～3 時間農作業は休み）、2 人船で近場の海に出かけ、練習というわけである。

その知人が 9～10 月に 2kg から 5kg のまづまづの大形サイズを合計で 50 匹程釣り上げた。

知人の親父も釣りをするのだが、虫エサの竿釣りでは便乗していくが釣れない。

そこで、手釣りで使っている 8 匁のゴムカブラをキス天秤に付け（一方に底とり用のおもりが付いている）、海底に落とし手釣りと同じように両輪リールで誘ってみる。

予想通りというか手釣りより効率が悪いがマダイが釣れる。

手釣りは底とりが難しいが、竿釣りは底とり用の重いおもりを付けるので誰でも底とりが出来る。

ということは老若男女問わずゴムカブラ釣りが可能となる。

そこから色々考え、からみ防止の天秤は現在の下向きに折れ曲がる形になり、ゴムカブラは竿用に 3 匁の小型のカブラになった。

これがいわゆる竿を使用したゴムカブラ釣りである竿カブラである。

カブラは魚の注意を引くために常に動かさなくてはならない。

竿カブラの場合、竿がクッションとなり微妙なアタリを捉えにくく、突然アタリが来たりするので手釣り以上に油断できない。

針掛かりした後も、魚信（魚のアタリ）が直接竿に伝わるため、バレることが良くある。

手釣りに関しても同じだが、ポイントで一流しすると、いろいろな情報が手や竿に伝わってくる。

手繰りあげている時のビシ道具の重さ、小型の魚がしつこく針に掛からずゴムカブラに付いてくる状況など様々な情報である。

鯛が釣れたときにも、口のどの位置に針が掛かっているかなどによって、ゴムの長さ、針の長さ・大きさ、ハリスの太さ（2号～4号）を考える。

最近ハリスの品質が良くなり、以前と同様の太さでも格段に強度が向上している。

通常は3号を主に、大物が予想される場合は4号を使うが、それ以上太いものを使うことはない。

その上の5号になると、伸びが極端に少なくなるので、針掛かりが悪くなってしまふのだ。

大物が来たとしても、4号で切られる場合は5号を付けても切られてしまふ。

なぜなら4号であっても根掛かりして引っ張り切ろうとすると、ラインが痛んでいない限り、通常使用している針（小鯛の11号）でもラインが切れずに針が伸びたり折れたりするほど、ハリスに強度があるのである。

ゴムの色について言えば、オレンジ色を主体に使用する。

より色の濃い赤色は大物が釣れると言われるが、多分赤というのは見えにくいので眼の良い魚か又は自身のテリトリーの広い大物だけが反応するからと推測される。

他に黄色、緑、白とバラエティがあるが、それぞれ天候、濁り、餌（ベイト）の状況など考えて、使い分けることもある。

ゴムカブラはいろんな魚、生き物が反応するので、鳴門のように潮の流れのある海であれば、うまく底とりと誘いさえ出来れば、アタリがあり、退屈しないというのが良い点である。

しかし、底取りと誘いがうまく出来なければ底に引っかけるばかりで、アタリはほとんどないといっても過言ではない。

しかしながら、底取りと誘いがそれなりにできるまでには時間がかかるだろう。

釣りに近道はないと言われるが、ゴムカブラ釣りについてもまさにその通りである。

理論や知識よりも経験が一番大切である。

釣果は当然大事であるが、大物のバラシ、ラインブレイク、根掛かりやライントラブル等。

こういった経験とかその日の体調に合わせた誘いのスピード、一瞬のたぐりミス等を経験しなければ対処できない魚の引きもある。

魚の引きは種類だけでなく、オスとかメス、あるいは性格（根性）の悪い引きといったものもある。

6 季節のセッティング

シーズンの始まりは、春4月である。

春のマダイは一般的に桜鯛とか登り鯛と言われ、春のエサ、イカナゴで釣るのが普通である。マダイはこの時期、群れて団体で移動するので定置網等では大量に漁獲されるが、ゴムカブラでは1匹ずつ 釣り上げるので、大漁というわけにはいかない。

効率的なイカナゴを使った撒き餌釣りでは、釣りとは言え多いときは100kg以上釣れる時もある。

地元でタイ網と呼ばれる小型定置網では一度の水揚げが数トンになるときもある。

まず水温であるが、4月は14°Cが目安であり、今までの経験では、産卵を終わりにかけている鯛から釣れ出すような感じで、案外水深が深めで、60m~70mあたりが主な狙い目である。

釣れだす初日は針掛かりが良く、釣れる平均サイズでもまずまずの大きさである。

この頃は水温が低く、アタリが小さくうす掛かりが多いので、強引なやりとりは禁物である。また、水濁りも少ないので、針は小さめを使い、ゴムの長さもあまり長くしないのがコツである。

5月に入ると水温も上昇し狙えるポイントも増えて、濁りが出なければ水深100mを超えた、普段あまり狙わないいわゆる釣り荒れていないポイントも狙うことが可能となる。

条件が揃えば仕掛けいっぱい120mまではビシ道具で狙うことができる。

底さえきっちりとれば、釣り荒れていないため相当良く釣れる場合もある。

底通りの簡単な竿カブラ釣りでは、それ以上の 140m ラインまで狙うこともある。

夏に入った 7 月後半からは、春と違い逆に水深の浅場で大型の鯛を狙う。

水温が上昇し、魚が活発に活動するこの頃は、浅場はエサ取り魚が非常に多く、エサ釣りで鯛を狙うのは特別難しい。

しかし逆に鯛にとってもエサが豊富であり、大型マダイにしても簡単にエサが多くとれるので、浅場に来る場合が多い。

したがって、擬似エサやゴムカブラ等にとっては最適といったところである。

秋の 9 月後半から 11 月頃、夏に多く沸くエサであるエビを主体に鯛がエサとする時期となる。

少し水深が夏からと比べて深くなり、台風とかで海が荒れると水が濁り釣りづらくなるが、鯛が群を作りやすくなって数が釣れやすくなり何と言ってもエビをエサにした鯛は味が良い。

冬場。ゴムカブラは本来夏の釣り方だが、私はお客さんなどには冬の鯛を釣るための釣り方であると、最近は説明している。

冬場は潮の流れがトロんだ短い時間帯に狙わなければならない。

鯛が大きな群を作ってエサを奪い合う時間にあたれば数釣りが出来るが、通常ビニールとかサバ皮を針にチョン掛けした針数の多い胴付き仕掛けが主流であるが、この釣りはポイントも限られるうえ、釣り痛みしてなかなか大漁というわけにはいかない。

しかも魚が底から 20m 以上浮き上がってこなければ釣りにくい。

逆にカブラはポイントが多い。

なぜなら、鯛が底から 5~10m 程度に群れている場所がポイントとなり、そういった場所は比較的多いからである。

アタリは多いときは 10 回誘えば 8 回アタリがあるといったこともある。

しかしこういったときは針掛かり悪いのが常である。
水温が低いので、魚が口を大きく開けないからだと思われる。

釣り上げる確率（キャッチ率）はアタリの 1 割以下である。

鯛は一年中美味しいが、なんといっても冬の鯛は一年を通して味が最高となる。

刺身が最高であり、身が透き通った黄色っぽい色をしていて身自体に味があるので、軽く塩につけて食べるだけで美味しい。

その他 おすすめは鯛シャブで、軽く火を通すことによって何ともいえないうま味と食感が生まれ、絶品である。

7 現在まで釣れた魚種と釣れない魚種など

これまでに釣れた種類を記すと次のようになる。

マダイ、ガシラ、キス、トラハゼ、カジカ、シイラ、マルソウダガツオ、サバフグ、トラフグ、ショウサイフグ、ハコフグ、アッコ（キジハタ）、ヒラメ、マゴチ、メゴチ、モクギョ（ミシマオコゼ）、キミオコゼ（ハオコゼ）、ドロオコゼ（オニオコゼ）、ウルメイワシ、マイワシ、カタクチイワシ、トビエイ、アカエイ、ノソ（小型のシロザメ等）クロソイ、ムラソイ、マルハゲ（カワハギ）、ウマヅラハギ、ウスバハギ、マルアジ（アオアジ）、マアジ（豆アジ～大アジ）、メジロ、ハマチ、シオ（カンパチ）、ウシノシタ類、ホウボウ、エソ、ベラ類、コブダイ（カンダイ）、マダコ、スルメイカ、イイダコ、ガンゾウビラメ、マコガレイ、イシガレイ、アイナメ、スズキ、イシモチ、カマス、サワラ、タチウオ、ゴンズイ等々。

このようにかなりの種類の魚が釣れているが、まだイシダイとかイシガキダイといった特別口の堅い魚が釣れていない。

ゴムカブラの動きから想像して、好奇心の旺盛なイシダイ系の魚は釣れそうなのだが、口の中に針が入らないのか、それとも口が堅く掛からないのか、20年のカブラ釣り人生の中で一度も釣れたことがない。

鳴門にイシダイ、イシガキダイがいないのではない。

20～30cm サイズは秋になれば時々釣れたという話は毎年聞かし、以前エビで釣っていたときは、3～5kg サイズが実際釣れていた。

特に潮止まり時の鳴門海峡中心部あたりの岩場には必ずいるのだが、実際の釣りでは当たってきているのかもしれないが、針掛かりに至っていないだけなのかもしれない。

主に狙うマダイは、それこそ 10cm に満たないものから大物は 6kg 位のものまで釣れている。

自分では獲ってないが、我が漁協のこれまでの記録は 11.6kg である。

その大きさに匹敵するであろう大物は、これまで自分は 1 回だけ掛けたことがあるが、残念ながらバラしてしまった。

そのときの状況は、3kg、4kg、5kg と大物ばかりヒットし（3kg で全長 60cm はある）、その後今までにない引き。糸が出るばかりで、引きの激しいこと。

まだ針はたっていないのは分かっていて、ライン（糸）がある程度出たくらいに締め込みにかかった。

ところがはずれてしまった。

歯に挟まってだけって感じだった。

ただ一年中マダイを狙っていても多分 10 年に 1 回あるかないかのアタリ、チャンスだったと思う。

8 ゴムカブラ釣りのこれから

ゴムカブラ釣りはエサ釣りでもなくルアー釣りでもない、古くて新しい釣りである。

仕掛けも釣り方もいたって単純であり、改良の余地は無いように見える。

しかしこれまでも季節限定の釣りから周年の釣りへ、また手釣りから竿カブラ釣りへの発展等、応用の幅はどんどん広がってきている。

したがって、これからも何らかのかたちで進化していくにちがいない。

【番外】

一弟子としての感想

「ゴムカブラ釣りは底とりを確実に手繰りあげる速度は必ず一定にする、という基本を忠実に守らないと絶対釣れず、基本を守らず釣れたとしてもそれは偶然にしかすぎない」

そんなことを言われても当初全く理解できなかった。

今までしてきた釣りはエサ釣りにしろルアー釣りにしろ、通常何らかの誘いは必ず行うのが基本である。

全く誘わないゴムカブラ釣りは今までの常識が通用しない。

釣りの経験のない初心者や、感覚の鋭い素直な子供の方が経験者より確実に上達が早い・・・こんな言葉が何となく理解出来たのは、初めてカブラ釣りを経験してからかなり経ってからだった。

まずは底とりである。8匁のゴムカブラはたったの30g、そんな軽さで深いところでは水深100mの海底にピタッともって行かなくてはならない。

特に鳴門海峡周辺は潮流が非常に速く、底とりの方法とコツを伝授されても当初は全く底とりが出来なかった。

ゴムカブラ釣りの底とり法は発想がすばらしく、教えてもらわないとどんなに頭にいい者でも思いつかないだろう。

慣れてくれば底とりだけで、潮の流れや早さ、海底の地形が何となく分かってくるのは不思議だ。

底とりが出来れば次は手繰りである。

慣れないうちは底とりもままならないし、微妙なアタリやいわゆる前アタリも全く分からない。

だんだん焦ってきて手繰っている。

途中で速度を変えたり、アクションを加えたりすると余計に釣れない。

言われたとおり一定速度で無心に手繰ることが出来るようになったのは、かなり時間がたってからである。

その頃から余計な力も抜け、ある程度冷静に対処出来るようになった感じがする。

次にアタリであるが、アタリがあり、ググッと針掛かりしたと感じられても一定速度で手繰る必要がある。

このことも当初理解できず、アタリがあったら合わせるのが常識なので、無意識のうちに力が入り合わせてしまうとまず釣れない。

普通の釣りとは違い、針先と正反対の方向から食いつくこの釣りは合わせてしまうとすっぽ抜ける。

このイメージがかなり経ってから手繰っている最中に浮かびだした頃、アタリがあっても焦って合わせることなく手繰ることが出来るようになった。

本格的に針掛かりしたと思われても、その後のやり取りはかなり慎重に行わなくてはならない。

相当経験を積めば鯛のどこに針が掛かっているのか、掛かりは深いか浅いか等が分かるらしいが、ほとんどの者は分からない。

基本的に針掛かりは浅いと考えた方がよい。

掛かりが浅いというのは、針が口にまともに掛からず皮一枚、すなわちクチビルにやっと掛かっているような状態である。

実際釣り上げてみると良くこんな状態で外れなかったな、という場合が多い。

最後に取り込みであるが、鯛は海底近くで針掛かりしても水面まで引きが衰えず、油断禁物である。

特に大鯛はタモ網に入るまで全く気が抜けない。

経験を積んでいくと、「相手は命がけで挑んでいるので釣っている側も「真剣にせなアカン」という師匠の言葉は全くその通りで、大きさ、種類に関わらず、やり取りした1匹1匹が大きな経験となって身に付いていくのが分かってくるのだ。

著者

三ッ石達生

編集

鳴門市撫養町大桑島すべり岩はま 17-1

エサヨシ釣具店

電話 088-685-0140

FAX 088-685-0140

無断で内容の転用は禁止いたします。